

釧路湿原自然再生協議会
第36回 再生普及小委員会
議事要旨

日時：令和3年2月19日（火）14：00～15：30
場所：釧路地方合同庁舎5階 共用第1会議室

1. 開会
2. 議事
 - 1) 再生普及小委員会の活動報告
 - 2) 湿原の保全や再生に係る情報発信の拡充について
 - 3) その他
3. 閉会

事務局

挨拶

(資料確認)

【議事1. 再生普及小委員会の活動報告】

事務局

資料に基づき内容説明。

(資料1-1 再生普及行動計画オフィスの取組について)

(資料1-2 「ワンダグリンド・プロジェクト2020」参加状況)

(資料1-3 小委員会事務局が実施する市民参加の取組の実施状況)

<動画再生>

(「釧路湿原ラムサール条約登録40周年記念市民講座」)

資料に基づき内容説明。

(資料1-4 参加者アンケート集計結果)

(資料1-1 再生普及行動計画オフィスの取組について

4. 湿原学習のための学校支援ワーキンググループの取組課題の推進)

<資料共有 PowerPointにて説明>

(取組課題1「湿原を題材とした学習素材の収集、活用の促進」の映像資料教材について)

委員長

釧路湿原はラムサール条約に登録され今年で40周年となった。記念して開催された3日間にわたる特別企画の市民講座を動画で紹介した。初回より最終日まで委員にお世話になったが、参加者の感想を聞いていければ伺いたい。

委員

初参加の方が多く、湿原の仕組みや再生事業実施の必要性を理解いただく有効な機会であった。子ども達や湿原に入ったことの無い方々に対し、似たような取組を行うことは自然再生の普及啓発に有効ではないか。

委員長

大人ばかりではなく、学生にも経験してほしい。

委員

このような活動に参加した子ども達は目の輝きがすごく、幼稚園や小学1年生などが新しい事を覚えられたなどと喜び、とても興味を持って活動していると感じる。

委員長

アンケートの回答では大変好評であるが、湿原に行く体験の企画についての意見、感想を伺いたい。

委員

感覚的、知識的にも現物を見ることは一番効果が高い。こういう経験の機会があることをできるだけ多くの方に知っていただきたい。参加者が11名というのは予定通りであったのか、もしくは少なかったのか。

委員長

募集はできるだけ多くの方に参加してもらえよう呼びかけをしている。現在はコロナウイルスの感染状況により、人数制限をせざるを得なかった。

事務局

参加者11名は市民講座の上限であった。応募は参加者の倍以上あり、抽選をせざるを得なかった。3回連続講座の内、座学は会議室で行うため人数を制限する必要があり上限を10名前後とした。

委員長

アンケートの回答で、「一番良かったことは、抽選に当たったこと。」と書かれているような状況であった。

学校支援ワーキンググループからの報告にあったように、学校への教材提供・授業支援、教員研修など様々な企画を立てて実施し、内容や回数も増えてきている。

委員

私は3年前に酪農学園大学を定年退職し、現在北星学園大学 人文社会系で教鞭を取っている。数学や統計学を教えると同時に、環境科学、生命科学を英文科、経済学科の学生に教えている。学生、教員の要望で自然と触れるようなエッセンスを人文社会系の教育にも盛り込んでほしいと言われている。本日は何か良いヒントを持って帰りたい。

委員

とても楽しそうで充実したプログラムであり受講したかったというのが率直な感想である。一昨年前は、私のゼミでも釧路湿原へ行く機会を持てたが、今年度は行くことができなかった。

連続プログラムは、とても深い内容を含んだプログラムである。3回の市民講座を受講された方は、その後更に活動を展開してガイド的な役割を果たしていただけるのではないかと。そういう機会を設けるにはどうすれば良いか、既に何か考えがあれば教えていただきたい。

また、学校教育への支援はとても重要な取組である。教員への支援、小学生、中学生に体験してもらうことは今後も推進して行くべきである。とても忙しいカリキュラムの中で学校側がどう対応しているのか、継続が可能なのかを教えてほしい。

委員長

様々なことを感じたということはプログラムに参加された方のアンケートの回答を読めばわかる。問題は、その場限りの体験に終わらずに、湿原の再生・保全の活動に加わる、企画を出して参加するというような活動を開始する道筋ができるかということである。

委員

講座を受けた方の中にワンダグリンダに新規登録された方がいると聞いた。

事務局

今回のリストに掲載した個人で新規登録されたご夫婦2人である。今年釧路に来られ、イベントへの参加をきっかけにワンダグリンダに登録いただいた。

委員長

イベント参加者が自然再生の活動に参加するというのが、少しずつでも続いていけば良い。

学校支援の活動は、様々な学校教育の中で釧路湿原をテーマや教材とし、先生に興味を持っていただく活動などを行っている。専門家からは、生徒たちが調べてそれを発表する形は、ここ数年で大変深まっていると聞いた。現在は、簡単に調べものをして、模造紙に書いて貼り付けるような発表から、パネルのように立体型にする方法に変化している。自ら疑問を持ったことや調査方法、調査結果、今後の課題をまとめるというような流れで進められている。テーマを分けながら進めていく方法は、研究者と同じく小学生から大学生までが行えるということ。着々と成長を感じるため、このような企画はとても重要である。現在、コロナウイルス感染拡大状況の中で、子ども達の心身の健康状態が大変心配されている。釧路湿原は広いため、子ども達の絶好の解放場所になると思う。上手く企画ができれば良い。昨年一年間で行われた釧路湿原に関する活動について感想を伺いたい。

委員

私たちが釧路湿原を題材にした環境学習を大学生と一緒に勉強している。活動の動画は大変素晴らしい。こういう環境が身近にあり、学校教育の中に活かされていくのは住んでいる人だけが受けられる特権のようなものである。環境教育が小学生から行われているということに大変意義がある。今の大学生は環境という事に対してとても敏感だが、体験まではできていない。受験勉強などにより、環境との触れ合いに時間を割くことが犠牲になっている。大学入学前に自然と触れ合えることは財産である。

委員

今年はコロナウイルス感染拡大の影響で北海道に行く事ができなかった。子どもの頃から自然に触れる事により、自然に対する道徳的な感性が芽生え、育まれる。そのような取組をされており素晴らしい。東京では教育の中でも外に出られず環境に触れられないという状況であるが、釧路でも同じような状況なのかもしれない。

委員長

生徒達が釧路湿原について学び、研究し、発表するという過程で、自分たちが住んでいる地域が非常にかげがえのないものだ気づくことがある。暮らしている場所がとても貴重な場所であり、誇りを持てるという発表が出るなど思いがけない効果がある。

委員

先程見た動画はすごく良い。ワンダグリンダ・プロジェクト参加団体の活動を伝えるのは写真や言葉が主流であるが、動画撮影して発信すると分かりやすくなるのではないか。

動画を見て参加したいという気持ちが沸くのではないか。ボランティアレンジャーの会には2年に1度の募集で新しい方が加入する。赤沼周辺でヤチマナコ体験などをすると、感激してより活動に一層力が入るといふことがある。

委員長

動画は単なる文書の報告などを超えて色々な意味がありそうである。実際に参加、体験した皆さんにも色々な影響を与えるのではないか。

委員

これまでは現地に来た人が何かを体験すること自体が一つのハードルであったかもしれない。北海道内からでも釧路には来られないような現状では、遠距離と近距離の差は無くなっているのではないか。実現するには様々な難しい問題があるかもしれないが、動画のコンテンツや新しいスタイルが普及するチャンスにもなり得ると感じた。

委員長

今後は遠距離を結んでオンラインを利用するなど、IT を活用する機会が増えるかもしれない。マイナス部分だけでなく新しい可能性が発見できないかを考えていきたい。観光客が何かに参加したことがきっかけになり、新しい事に参加される道が開けるといふような事はあるか。

委員

リピーターになって二度三度と来ていただくというのが観光の誘客の進め方である。初めて釧路に来た観光客の皆様が自然体験をした後、地元へ帰り友人などへ伝えていただくといふことがある。観光連盟では、今後の観光の誘客を情報発信に特化して進められるよう、新しい試みを進めているところである。

委員長

何か新しい方向性が出てくると良い。大人だけではなく子ども達にも参加してもらえるような企画、釧路湿原で貴重な自然の中で育まれる感性や知識が育まれるような企画を立案できるよう今後も努力していきたい。自然を味わうだけではない新たな参加の仕方があるのではないかと動画を見ながら思った。釧路湿原国立公園連絡協議会では、国立公園のイメージの見直しを考えておられると伺っている。

委員

釧路市役所は釧路湿原国立公園連絡協議会の事務局も兼ねている。釧路湿原国立公園連絡協議会にこどもレンジャーという組織があり、その中での湿原の体験は、湿原学習の

ための学校支援ワーキンググループで行われている学校教育プログラムとも共通するところが多い。参加者の一人が芦野小学校に在籍しており、芦野小学校での学校教育プログラムで環境省の職員からの助言を受けた後に、こどもレンジャーの活動に参加してくれた。我々の団体と再生普及小委員会の活動が連携できれば、こどもたちの活動の機会が増えるのではないかと感じた。

委員長

連携する、繋がることで効果が上がるのではないか。

【議事2． 湿原の保全や再生に係る情報発信の拡充について】

事務局

資料に基づき内容説明。

(資料2 湿原の保全や再生に係る情報発信の拡充について)

委員長

資料の整備では、図書館、博物館などに書籍等の紙資料を中心に関係資料の収蔵を進める。当面、釧路市中央図書館を対象とし、流城市町村の図書館に拡大していきたい。特色のある蔵書や資料等を統一し、一つのキーワードによる検索が可能となるような仕組みを構築していきたい。

もう一つ、各小委員会のニュースレターを情報発信のツールとして活用することとした。

委員

釧路湿原自然再生協議会では、それぞれの小委員会でニュースレターなどの様々な印刷物を発行している。これまでは市民の目に届いていないため、図書館が最初の窓口になり皆さんに届けようという取組である。

委員

何かあった場合のためにも記録として残しておくというのは原則である。

委員

今回の再生普及小委員会から参加させていただくことになった。これまで河川環境再生小委員会や地域づくり小委員会に関わってきた。釧路湿原再生協議会には発足直後より関わってはいないため、発足時の議論を確認するにはニュースレターが一番分かりやすかった。過去のニュースレターをホームページから検索するのはとても手間がかかる。ニュースレターが一つのファイルになるだけで十分に役立つ。

委員長

ニュースレターがすぐ手に取れる形で揃っていることが重要である。釧路地方の公共施設や博物館などで、最初に発行されたニュースレターを見られることはとても有意義である。釧路市中央図書館の収蔵方法やデータベース化に向けた検索キーワードの選定など、担当者と打合せを行い取組んでいく。これまでの釧路湿原のキーワードは保全や保護という言葉が多かったが、統一したキーワードとして自然再生、小委員会名、事業地名などが候補として挙げられる。図書館等へ情報提供していきたい。

委員

図書館でのキーワード検索を整備し、地域の図書館で釧路湿原や自然再生の資料がすぐ見られる仕組みを構築するのは大賛成である。酪農学園大学の図書館と連携できる方法を考えていきたい。デジタルで繋ぐことが一番の近道だが、紙媒体でも「釧路湿原コーナー」のようなものを作れると面白い。

ニュースレターを束ねることに大賛成である。再生普及小委員会の大きな役割の一つは、各小委員会で行われている事を分かりやすく理解できるようにお手伝いすること。

釧路湿原自然再生事業は順調であるが、ルーティン化している印象がある。Web サイトは各実施者が運営しており全体像が見えにくい。全体を一目で見渡せるようなポータルサイトができると良い。どのようなお手伝いできるか考えていきたい。

委員長

以前にもポータルサイトができないかと議論になった。使いやすく、見やすく、分かりやすい形へと移行する努力を続けたい。

委員

初めての参加である。先程の動画は臨場感があり感動を伝える素晴らしいものであった。図書館で文字情報での閲覧ということだけではなく、動画を地域や全国の方にも見ていただいてはどうか。YouTube の活用や観光協会と連携するなど、素晴らしい映像を次々に流せるよう、使えるコンテンツの整理をしてはどうか。

委員長

動画は容量が大き過ぎることがあり、短く編集する作業が必要である。それぞれの機械の能力など様々な問題もあり参考にして努力したい。動画に限らず、グラフィカルな資料、音などの様々なデータ資料を網羅できるように考えていきたい。

委員

私は現在奈良在住のため近畿環境事務所の管轄や熊野、西大台の広報などは耳に入るが、釧路湿原の情報は届いてこない。一昨年前にテレビ番組ブラタモリで、釧路湿原が素晴らしい紹介のされ方をしていた。環境省でも各事務所に全国の国立公園を紹介するパンフレットを置くと良いのではないかと。私が奈良や京都の環境団体と仲介し釧路湿原を紹介することもできるのではないかと思う。何かコンテンツをいただければ話を持っていきやすい。全体にネットワークを組んで広報を行う事が必要なのではないか。

委員長

希望される方へコンテンツを届ける仕組みができるよう努力したい。

委員

先程の動画を見て非常に感銘を受けた。私の立場から、生徒を引率して釧路湿原へ行くのは無理である。先程の動画を教員や学生に紹介したい。

観光学の研究者から、釧路湿原では自然の資源をどのように活用されているのかと聞かれた。ビジネス側の観光は諸刃の剣であり、手つかずに近い自然が台無しになってしまう恐れがある。どのように釧路湿原関係者や自然再生協議会メンバーへ紹介すれば良いか考えている。

事務局

動画を活用いただきたいが一般の方の顔が映っている。共有するためには検討が必要である。

委員長

動画はもっと長くできるのか。

事務局

イベント中は全て録画しており、今回は短く5～6分にまとめている。編集の手間はあがるが物理的にできないわけではない。

委員長

定刻となったため、本日の会議は終了する。

事務局

以上で第36回再生普及小委員会を閉会とする。

(終了)